

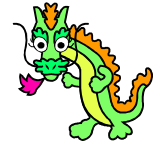
龍のように上昇気流に乗って・・・

「辰年」が明けました。十二支の中で「辰」は「龍」または「竜」とも表記されます。「子丑寅卯・・・」から始まる名前は実際に地球上に現存する動物です。でも唯一、龍だけは伝説、架空（想像＝創造）の動物です。でもしっかりと社会の風習にも溶け込んでいます。

なぜ龍だけ特別に取り入れられたのでしょうか？

ものの本（というより今はネット）によると：

竜（りゅう、りょう）は、中国神話の生物。古来、神秘的な存在として位置づけられてきた。旧字体では「龍」だが、字としては「竜」の方が古く、甲骨文字から使われている。荘厳にするために複雑にしたのが「龍」である。今日でも広く用いられ、人名用漢字にも含まれている。ドラゴンの訳語として「竜」が用いられる。（名古屋の皆さんにとっては昨年が「ドラゴンズの年」でしたね）



竜は神獣・霊獣であり、中国では皇帝のシンボルとして扱われた。雷雲や嵐を呼び、また竜巻となって天空に昇り自在に飛翔すると言われる。「竜に九似あり」とされ、角は鹿、頭は駱駝、目は鬼、身体は蛇、腹は蜃（しん＝おおはまぐり）、背中の鱗は鯉、爪は鷹、掌は虎、耳は牛に似ているという。

竜にまつわる熟語や比喩もいくつもあります。

「登竜門」＝中国黄河の上流にある急流で、ここをさかのぼることのできる鯉は竜になる、との故事から、立身出世の意味になった。日本でも各分野でそのトップ（レベル）に至る試験や資格審査の過程をこう呼んでいますね。

「竜頭蛇尾」＝最初は竜のように大きく強く勢いがあっても（大いなる野望や夢、プロジェクトなど）、途中から力が抜け次第に弱く蛇のように細くなりつまらなくなっていくこと。こうあってはならない、との戒めに使われることが多いですね。

鎌倉時代の日蓮大聖人の御書（弟子への手紙や論文）の中でも、中国の竜門についての記述があり、鯉が竜になるのがいかに難しいかの例えから成仏することの難しさを説いています。



正月の寒空に舞う凧にも、今年はきっと龍の絵や文字が多いことでしょう。私が愛読するセルバンテスの作品の中のドン・キホーテは、愛馬ロシナンテにまたがっていました。



あれから 400 年あまり——飛行機に乗った“東京のドン・キホーテ”も今年は龍のように力強く上昇気流に乗って“見果てぬ夢”を追っていきたく願っています。